

近代日本における中国哲学の誕生

明治十年代に東京大学で行われた諸講義を中心に

佐藤将之

はじめに

本稿は現在「中国哲学」あるいは「東洋哲学」と称されている思想研究の領域が明治期の日本においてどのように成立したのかを明らかにするための一試論である。冒頭から意外に聞こえるかもしれないが、過去、日本の中国思想・哲学研究は、日本における「中国哲学」研究が明治時代を射程に入れた上でどのように展開されてきたのかという問題に対して、ほとんど関心を向けることがなかった。管見によれば、このテーマでのまとまった論述は赤塚忠(1913～1983)と坂出祥伸(1934～2020)のものくらいしか挙げることができない⁽¹⁾。しかもその両者の論考ですら明治期に関する記述はわずかにすぎない。

特筆すべきは、近年ではむしろ日本人以外の研究者の間でこのテーマに対する興味が徐々に高まっている状況である。やや早くには現在弘前大学の教授で、当時は東京大学大学院に在学中であった李梁が一九九三年に著した「近代日本中国学におけるポリティックスとアカデミズム——服部宇之吉と近代中国学」という研究報告書があるが、二〇〇七年になると深圳大学の景海峰主編になる『拾薪集・「中国哲学」建構的當代反思与未來前瞻』(北京大学出版社)という論文集が出版され、ジョン・メイカム(John Makeham、中国名は「梅約翰」)による「明治学術資源、論理学與

中国哲学的雛形」とバリー・ステベン(Barry D. Steben、中国名は「石百睿」)による「早期現代東亜学術裡的東西哲学交織与「中国哲学」的誕生」と、日本における「中国哲学の誕生」を主題にした二本の論考が収録されている⁽³⁾。二〇一〇年になると、中国広州の中山大学の桑兵(現在は浙江大学)による「近代「中国哲学」発源」が発表された⁽⁴⁾。この一文は二〇一三年に日本語にも翻訳され出版されている⁽⁵⁾。また最近では台湾大学の陳威瑋が日本と中国における「中国哲学」学術領域の形成に関する比較研究を発表した一方で、二〇一六年に李慶や藤井倫明の観点から示唆を受けた中国人民大学の曹峰も「對内田周平的重新認識」という一文を著し、近代日本において最初に「中国哲学史」を出版した人物は内田周平(1894～1944)であると主張している⁽⁷⁾。その他、最近の学位論文提出の動向に目を向けてみると、まだ書肆からは出版されていないものの、近年からごく最近にかけて、明治時代における「中国哲学」学術形成のテーマに関連する議論を含む博士論文がいくつか提出されている⁽⁸⁾。

以上に挙げた諸論考のうち、本稿との問題意識が近いのはメイカム、ステベン、桑兵、それに陳威瑋の論考であるが、メイカム、ステベン、陳の論考は、明治期における西洋哲学の日本への移入を「中国哲学」という学術領域形成の契機としている点は、その視野に捉えているものの、明治期(特にそのうちの二〇年代と三〇年代)の学者(例えば井上哲次郎や井上田了など)による「中国哲学」の議論への分析がほとんどない。それに比べ桑兵の論考は明治時代における「哲学」の移入が、「中国哲学」という学術領域へいかに展開したのかという問題をかなり具体的にトレースしようと努力している。しかし、桑兵本人が関連資料の不足を嘆いているように、中国哲学に関連したトピックが明治時代中期にどのような学者によって、どのように論ぜられていたかという実際の状況についての具体的な分析はあまりなされていない。

以上の研究状況を踏まえ、本稿はまず明治思想史を研究する上で無意識に抱きやすい方法上の問題や研究視野において克服すべき点を指摘する。つぎに「哲学」という概念が明治期の日本において本格的に移入されたのを契機として「中国哲学」、あるいは「東洋哲学」という学問領域が形成されたプロセスにおいて、当時の東京大学で行われて

いた講義や、その卒業者たちの著述が大きな役割を果たしていた状況を明らかにしたい。そしてそれらの議論を踏まえて、江戸時代以来の経学、あるいは儒学の内容や価値体系が、明治期を通じて「哲学化」というモメントを経ることにより、「人格修養」や「国民道德」などといった近代的特質を備えた主張に再構築され、当時の日本人の思考の中に再定着していったという可能性を示唆したい。

1 過去における明治思想研究の二つの問題点

さて、本稿が設定したような「明治時代の日本における中国哲学の誕生」というテーマに対する考察が過去あまり進展しなかった理由の一つとして考えられることは、このテーマが同時に明治思想史という研究領域にも属するということをお案すると、日本における明治思想研究そのものが内包する問題とも関連していそうである。そこで筆者はまず「中国哲学の誕生」というテーマからは若干考察の範囲を広げた視野に立って、日本における明治思想史研究について気づいた問題点をいくつか指摘してみるところから本論を始めてみたい。

まずそもその問題は、近代日本思想研究者の視野における明治中期の学術的著述に対する関心の低さである。その研究業績の総量でも、福澤諭吉（1835～1901）一人のものにも及ばないのではないか。

明治時代の思想研究を主導するアプローチは従来、主に二つあった。一つは、もともと西洋哲学専攻出身の研究者によく見られる方法で、西洋哲学の受容度から明治の各思想家の「理解」の度合いを分析、評価するアプローチであり、もう一つはいわゆる日本思想研究者に多い、明治の時代背景やそれぞれの思想家たちの社会との関わりを重視するアプローチである。

まず西洋哲学専攻の研究者による明治思想研究へのアプローチでは、まずその研究対象の思想家がいかに関西思想の影響を受けたかに注目する。したがって、その叙述する思想内容も、その対象の思想家の思想そのものというより、

その思想家が受容した西洋思想の特質が中心になってくる。問題は、このアプローチだと明治知識人たちが西洋思想を受容する前の伝統思想の役割を過小評価してしまうくらいがある。

古典的な研究からの例として、もともと西洋哲学の研究を志した丸山眞男（1914～1996）が一九四二年に発表した福澤思想研究を見ると、丸山は断定的に「学問対象としての儒教のごときは、到底その論理的精緻と体系的整序性に於いて近代科学の前に堪え得ないからさほど問題にするにたりない」と喝破している。⁹ 周知のように、丸山は二十世紀後半の徳川思想研究に圧倒的な影響を与えた『日本政治思想史研究』における例のように、¹⁰ 儒学思想（丸山によれば朱子学）の構造的特質は江戸時代の主に古学派による思索を経て「解体」させられてしまったと結論づけているため、明治時代の儒学というのは、克服されるべき「視座構造」（丸山語）という形でしかその思想的役割を発揮できないのである。¹¹

近年の研究でもう一つだけ例を見ると、「明治以来日本人は何をどのように考えて来たか」という副題を附した濱田恂子の『近・現代日本哲学思想史』（二〇〇六年）も、「明治時代の初期には儒学はすでに説得力を失い、もはや人々にとって精神的支柱ではありえなかった」とし、あたかも明治時期における西洋思想の受容プロセスにおいて儒教が全く作用していなかったかの如く捉えている。¹²

続いて主に日本思想史そのものを専門とする研究者による明治思想研究の状況を見ると、個別の例は挙げないが、明治の政治・社会事件の諸相や、研究対象の出自、階級、政治社会背景等をその思想展開の軸と見て、それら与件に対する思想家の反応、あるいは対応の連続や変化をその思想家の思想的特徴として描写する傾向が強い。もちろん、江戸時代や明治時代の思想研究において、それぞれの思想家が生きた時代背景を重視することそれ自体に問題はない。しかし、二十世紀後半期における日本思想史研究アプローチによる明治思想研究の著書の多くは、時代背景を重視するあまり、結果としては、上記のアプローチと同じように、儒教的世界観から来るものの見方、価値観、それに問題や議論の立て方が、明治の知識人等の学問にも甚大な影響を及ぼしていた可能性についてはあまり注意を向けない傾

向にあった。¹³⁾

しかしながら、以上のような状況に対する批判的観点も実は少なからずあったという事実にも目を向けなければ公平な態度とは言えないだろう。筆者が知る範囲でいくつか挙げてみると、一九七〇年代になされた渡辺和靖の研究は明治知識人の西洋思想受容プロセスにおける儒教思想の影響を正面から扱った試みであった。渡辺は明治知識人たちの儒学思想への受け入れの度合いが世代間で異なっていた事実注目し、まさにその違いこそが、その思索における儒学と西洋思想との間の葛藤方式への差として現れるという重要な指摘をしている。¹⁴⁾ また、近年では井上克人が渡辺の研究も参考にしつつ、明治哲学の底流にある「宋学的ストイシズム」の重要性を繰り返し指摘した。¹⁵⁾ 海外の研究では、キリ・パラモア (Kiri Paramore) の最近の著作でも、儒教の中にもともとあった普遍主義、平等主義、反資本主義的要素こそが、西洋思想のパラレルな思想部分の受け入れを可能にしたという指摘もある。¹⁶⁾ ただし、井上の研究にせよパラモアの研究にせよ、「儒教的要素」の説明は江戸期までの儒教内容をそのまま叙述するにとどまり、本稿が述べるような明治儒教の内容的特色、つまり明治という時代が儒教あるいは儒学を「中国哲学」あるいは「東洋哲学」という新たな知的領域へと変質させたようなダイナミズムについては、あまり注意をはらっていない。¹⁷⁾

以下に述べるように、明治の儒教、あるいは経学は、丸山が言ったような「近代科学の前に堪え得ない」ものではなく、また濱田の言うような「すでに説得力を失」なったものでもなかった。むしろそれは、「近代科学」を統括するものと明治人の眼に映った哲学という新たな学術方法を得て、「中国哲学」や「東洋哲学」という学術領域へと変質し、再生すべきものであったのである。

2 「東洋哲学」学問領域形成の磁場としての東京大学

では、我々が「中国哲学」或いは「東洋哲学」とよぶ学術領域は、明治時代の知識人たちの西洋哲学受容のプロセ

スにおいて、内面的にはどのような思考のダイナミズムを起こしながら形成されてきたのであろうか。まず、時期と場所を限定して、それを具体的な歴史的事実として描写すれば、それは明治二〇年代、あるいは一八八〇～九〇年代の二十年前後の期間を中心とする東京大学（とそれに続く帝国大学）において誕生したと言ってもよいだろう。明治初期における東京大学設立の経緯と初期の文学部の制度や人事をめぐる変遷については、多くの説明があるのでここでは省略する。¹⁸⁾ 筆者の関心は、設立期の東京大学において「中国哲学」という領域周辺の人や制度がどのように動いたかというプロセスを追うのではなく、そこで実際に教壇に立った人たちが、現在でいうところの「中国哲学」に関する講義や著述において、どのようなことを論じたのかを知り、その意義を考えてみることである。

筆者の卑見が及ぶ範囲で「中国哲学」という学術領域の誕生とその形成というテーマと関連して、そのモメントと見なせるのは主に以下の四点であろう。一つ目は、アメリカ人フェノロサ (Ernest Francisco Fenolosa, 1853～1908) が一八八二年二月から一八八三年一〇月まで講じた「哲学」かあるいは「社会学」の授業において「中国哲学の発展」をテーマとした講義を行ったこと。二つ目は、東京大学設立時代にその総理であった加藤弘之 (1836～1916) が一七八〇年（明治一三年）「哲学専攻」の第一期の卒業性である井上哲次郎 (1956～1944) を任用する際、主要な任務として井上に『東洋哲学史』を編輯させたこと。そして、哲次郎もその要望に応え、その内容の講義を実際に行った。三つ目として、フェノロサや哲次郎の後に、伝統漢学の立場から「支那哲学」の講義を行った島田重礼 (1838～1898) らもおり、後述のように島田の講義によって始めて中国哲学の通史全体が講述された。そして四つ目は、明治一〇年代当時ではまだ学生であった井上円了 (1838～1919) や瀧川亀太郎 (1865～1946) らが、その頃から明治二〇年代を中心に各種論考を公刊することによって「東洋哲学」研究領域形成の先駆的役割を担ったという状況である。

それでは、以下では、東京大学創設期に「中国哲学」という学術領域の形成において「哲学」がどのような役割を担ったのかの一端をフェノロサ、井上哲次郎、そして島田重礼の役割を中心に、概略的に述べて見たい。

周知のように、東京大学は一八七七年（明治一〇年）に設立され、その第二年（即ち一八七八年）に文学部が「哲

学史学政治学科」と「和漢文学科」に分かれた。当時のカリキュラムを見ると「哲学」は「哲学史学政治学科」の課程における必修科目となっていることが確認できるが、その実質内容に我々が思い描くような「中国哲学」の内容がどのように盛り込まれていたかについてはよく分からない。ただ一八八三年（明治一六年）度の「東京大学法理文三学部一覽」における記載によれば、當時、東京大学では、いわゆる「中国哲学」の内容を学生に提供していたという方針については確認できる¹⁹⁾。

筆者が目下知り得た限りで、創立時期の東京大学において（当時の）「哲学」という観点から、あるいは「哲学的問題」を意識しつつ孔孟思想や諸子百家思想、それに経学というテーマに関して講義された科目としては以下の三つが確認出来る。²⁰⁾ (1) フェノロサが一八八二年二月から一八八三年一〇月まで講じた「哲学」かあるいは「社会学」の授業において口授した「中国哲学の発展」に関する講義。²¹⁾ (2) 東京大学哲学科の第一期卒業生である井上哲次郎が一八八二年の冬から一八八三年の秋に開講した「東洋哲学史」。²²⁾ (3) 島田重礼が一八八五年（明治一八年）九月から一八八六年の春に講義した「支那哲学」。

次に具体的な講義の内容に目を向けて行こう。以上三者のうち、まずフェノロサについてであるが、フェノロサは一八七八年（明治一二年）八月に來日し、一八八六年（明治一九年）七月三〇日までの八年間にわたって哲学、哲学史、理財学（経済学）、政治学、論理学の五科目を教授した。フェノロサ自身は専門にいわゆる東洋哲学を主題とする教科を講義することはなかったが、フェノロサの講義の受講生の一人である井上四丁が記録した「哲学」あるいは「社会学」の講義ノート（一八八二年二月から一八八三年一〇月の間のものと推察される）を見ると、フェノロサが「中国哲学の発展」と名付けた小テーマの講義をしていた事実を知ることができる。その講義の分量自体は少なかつたようであるが、幸いその内容が記録され残っている。フェノロサは講義の中で「If we can unite the doctrine of Spencer's Evolution & Hegel's Philosophy, we will have a complete philosophy.」と主張し、哲学と実際の社会はお互い密接に影響を与えながら発展するという弁証法的歴史モデルを提示した。そして、中国の古代哲学も「正・反・合」の弁証

過程を経て展開したのだと主張した。このような理論的枠組みにより、フェノロサは戦国諸子の思想傾向を三つの学派として理解した。ただこの「三つの学派」に対し、フェノロサは固有の名称を与えておらず、「第一」、「第二」および「第三」という数字による分類のみを提示している。それぞれの思想内容を見るに、「第一学派」は儒家の哲学者を主とし、孔子、孟子、荀子および揚雄が、「第二学派」には老子、莊子、列子等のいわゆる道家と韓非子が、そして「第三学派」には楊朱と墨子が属している。

次に井上哲次郎の「東洋哲学史」についてであるが、この講義は一八八二年（明治一五年）の冬より翌年一八八三年（明治一六年）六月まで続いたと推測される。周知のように哲次郎はそのさらに翌年である一八八四年の二月にはヨーロッパ遊学に向けて出発する。この講義は東京大学で正式に「哲学」のディシプリンを経た人材によって教授された「東洋哲学史」と題された最初のものである。科目名には「東洋」を冠しているが、実際に教授された内容は中国古代哲学である点にも留意したい。この講義の内容については、二種類のノートが現存している。²³⁾

それら現存している二種の講義ノートの内容を総合してこの講義内容の特色をみると、まずその総論的な部分において、哲次郎は中国哲学の歴史を五期に分けており、その中で東周から秦朝までを「第二期」とし、「思弁」的な性格をこの時代の哲学発展の特色とする。この時期の思想活動について、哲次郎は「孔子は仁を説き、孟子は仁義と性善を説き、荀子は性悪を説き、老莊は虚無恬澹を説き、楊墨は一家之説を起す……」と説明する。哲次郎は戦国時期の主要思想家の名前を列挙したあと、それらの主張が西洋哲学のどの部分に対応するかを列挙している。またこの単元の最後では再び戦国諸子の主要な主張を「孔子→利他主義」、「楊子→自利主義」、「墨子→兼愛主義」、「老莊→放任主義」、「申韓→干渉主義」、「管商→功利主義」など六種の「主義」に分類している。²⁴⁾

東京大学において三番目に中国哲学を講義した學者としては島田重礼がいる。島田は年齢的にはフェノロサや井上哲次郎よりやや上の世代に属し、明治維新以降には漢學者としてすでに自ら開いた私塾で子弟を教育していた。当然、フェノロサや井上哲次郎のように「哲学」を「正規に」学んだ経験はない。島田は一八七九年（明治一二年）より東

京大学文学部にて教え始め、翌々年の明治一四年に教授に任命されている。島田がいわゆる「支那哲学」を教授したのは、井上哲次郎が日本を離れ、ヨーロッパに滞在していた期間とも重なり、一八八四—一八八五年（明治一七—一八年）の「東洋哲学」では『莊子』について講義したという。⁽²⁷⁾しかし、より着目すべきは翌年一八八五年から二年にわたるスケジュールを費やして、井上哲次郎が一八八三—八四年度に行ったような中国哲学の通史の講義を行ったことである。円了ノートや高嶺ノートの記録によれば、哲次郎の「東洋哲学史」講義は前漢末年の揚雄部分で終わっているのに対して、島田の「支那哲学」講義の範囲は清朝時期にまで及んでいる。具体的に講義の内容を見ると、島田は講義の最初に「仁」、「義」、「忠信」、「孝悌」等中国哲学の主要徳目について講述した。そして翌年の一八八六年二月一〇日からは戦国時代の諸子百家の思想内容の解説に入る。一八八七年に入ると漢代思想の解説をし、同年六月には清代思想の講説に及ぶ。つまり島田の「支那哲学」の講義の内容は、厳密に言えば「哲学」という観点からのものとは言えないが、当時東アジアの近代高等教育機関において、講義名に「哲学」という術語を冠して古代から近代までの中国思想の内容を通史として提供した最初の講義だということができる。

以上は東京大学の創設期、すなわち一八八二—一八八五年（明治一五—一八年）前後に現在で言う中国哲学に関連した内容がどのように講義されたかという状況の概観であるが、明治時期における中国哲学という学術領域の形成過程において、実は講義者であるフェノロサ、井上哲次郎、島田重礼の三人の他に、極めて重要な役割を果たした人物がもう一人いる。それはその三人すべての授業を受講した井上円了である。筆者が知る限り、井上円了は、哲学というデイスプリンを身につけた上で中国哲学／倫理に関する（翻訳ではない自らの）著述を実際に出版した東アジアにおける最初の知識人である。それらの論述は『哲学要領』（一八八六年＝明治二〇年）における「第三段：支那哲学」部分、『倫理通論』（一八八六年＝明治一九年）における第一篇第一章、第一七章の「中国古代の倫理」に関連した説明、『純正哲学講義』（一八九一—九二年＝明治二五—二六年）の「東洋哲学」部分「支那哲学」関連部分に見られる。言うまでもなく、井上円了の中国哲学史の説明はフェノロサと哲次郎の理解に沿ったものである。しかし、より詳

細に比較すると、まず井上哲次郎の中国哲学に対する説明が西洋哲学中とのカウンタパートとの類比に留まり、また島田重礼の説明も思想家の名を冠した各文献の叙述的説明に留まっているのに対して、円了の中国哲学へ説明が「儒家」（孔子）哲学と「道家」（老子）哲学における異同を明らかにする考察を主軸として、個別の思想家の思想特徴が丁寧に説明されていることに気づく。さらに、フェノロサから学んだであろう「弁証法」によって中国哲学の展開を説明する中で、個別思想間の関係やそこからの展開がより無理なく把握されている。つまり、円了の「中国哲学」に関する記述は、フェノロサ、井上哲次郎、島田重礼の見解を総合して、それらの見解を一歩進めて体系的に把握した観がある。

円了がこうした著述を著した時期と同じく、東京大学出身者で、哲学を意識しながら諸子百家の思想内容に関して多くの著述を発表した瀧川亀太郎や、講義録という形ではあるが、哲学的観点を意識して老莊思想の特色を論じた講義録を発表した内田周平（1894—1944）の存在も見落としてはならないが、我々が中国思想分野とみなす諸文献の内容を当時において比較的完成度の高い哲学史として最初に叙述することに成功したのは井上円了だったのではないかと筆者は考えている。

3 「哲学」的視野による儒学理解の推進と定着

では明治時期における「哲学」というデイスプリン、あるいは学術体系の移入によって、「中国哲学」あるいは「東洋哲学」はどのような探求内容を中心とする学術領域を形成したのであるうか。ここでは、明治の知識人たちが「哲学」という分析手段を用いて、伝統思想におけるどのようなテーマを具体的に考察しようとしたのかを見てみたい。筆者の理解によれば、明治の知識人たちがこの時期、最初に注目した主要なテーマは二つあるようである。一つ目は「性」という概念である。東アジア思想伝統の中で「性」という概念は、言うまでもなく朱子学の代名詞（「性

理学)になるほどの核心概念であった。それが明治時期になると、「ヒロソヒー」つまり「philosophy」という概念の移入にともない、当時の啓蒙知識人、伝統知識人を問わず、「性」という概念に「哲学」と何か関連する可能性を嗅ぎ取った。啓蒙知識人では西村茂樹(1888~1902)⁽²⁸⁾が、その後、明治二〇年代になると、陽明学者の三島毅(1831~1916)⁽³⁰⁾が、そしてヨーロッパから帰還した井上哲次郎など、当時、新旧にわたる世代の明治の思想家たちが注目し始めた。やがて「ethics」という概念の受容と「倫理学」という学問領域の形成もあいつて、「仁」「義」「礼」「智」「孝」「忠」「誠」などの儒学の「徳目」も、「支那哲学」の核心的価値を占める「倫理観念」として再定義されていた。

二つ目は「孔子」をめぐる議論の展開である。いうまでもなく徳川時代の官学は儒学であり、当時では江戸城の北側、現在の御茶ノ水駅付近にある湯島聖堂(昌平坂学問所)には孔子が祀られ、幕府主催で定期的に「釋奠^{せきけん}」と呼ばれる孔子に対する祭祀が行われた。つまり、孔子は徳川体制が奉ずる聖人であった。明治維新を迎えると「釋奠」は廃止され、その「跡地」には、文部省、高等師範、お茶の水女子大学などの機関が置かれた。しかし、それは明治の官僚や知識人たちが孔子を崇尊していなかったという意味では全くない。湯島聖堂における「釋奠」は、のち嘉納治五郎(1860~1938)等の努力により、一九〇七年(明治四〇年)に大盛況の中で復活するが、実はその間に明治の知識人たちが、新旧世代を問わず膨大な量の孔子に関する言論、研究を発表していたという状況を看過してはならない。⁽³²⁾井上円了などは一八八五年(明治一八年)から、独自に孔子を祀る活動を始めている。つまり、明治中期から大正期の日本というのは、江戸時代に劣らず孔子が強く意識された時代だったのである。

この時代の明治知識人たちによるあまりにも膨大な量の孔子論や孔子を憲章する言論や行動内容についての全体像を示すことは現在の筆者の能力を遥かに超えるが、本稿に関連する意義についてのみ若干の指摘をしておく、「哲学」という分析の切り口を獲得した明治の知識人たちが明治中期以降、「哲学」あるいは「倫理学」を導入した孔子に関する「研究」を展開することにより、孔子のイメージを徳川時代における「経学の祖述者」といったいわゆる

「儒学の聖人」から人類の普遍的な道徳、あるいは倫理的価値を実践する「哲学者」、あるいは(西欧やインドに対する)支那における哲学の創始者として、そのイメージを再構築していく。⁽³³⁾そして、そのプロセスの一つの「完成」を象徴するのが、一九〇四年(明治三七年)における蟹江義丸(1872~1904)『孔子研究』の出版であった。⁽³⁴⁾大正以降、日本の学術や教育行政をリードした服部宇之吉(1867~1939)や新渡戸稲造(1862~1933)などが抱いていた孔子のイメージは、経学の聖人としてのみの孔子ではなく、井上円了や蟹江義丸等が描いた人類普遍の道徳実践者である哲学者孔子なのであった。

おわりに

「中国哲学」という学術領域は明治時期の日本において誕生した。このプロセスの思想史上の重要性というのは、明治前半期、創立まもない東京大学において、いわゆる「哲学」というディシプリンが受容されたことによって、当時「漢学」や「東洋思想」を専攻とする若い知識人たちに西洋哲学の知識が普及し、それに対する理解がただ単に深化したという意味にだけではなく、当時の若い教師や学生たちが「哲学」によって中国古代の経書や諸子百家をめぐる文献の内容や意義を新しく構築、あるいは展開したという意味にあってなのである。そして当時「支那哲学」、あるいはより広義に「東洋哲学」と呼ばれた中国哲学という学術ディシプリンは、近代国家建設という歴史的・制度的要請を背景として、東アジア伝統思想に関連したテーマを研究、議論する学術的枠組みとして、日本の知識人ばかりでなく、清末から民国初期に活躍した中国啓蒙知識人たちの自国文化や思想への再認識にも少なからぬ影響を与えた。

またその一方で、明治初期の東京大学、またその後継機関である明治中期の帝国大学で哲学教育を受けた知識人たちの多くは、程度の差はあれ、幼少期から青年期という大学入学以前の段階において、すでにカリキュラムとし

て確立された漢学教育を受けており、彼らが大学を卒業したあとまでも、変わることなく「経学的めがね」で新たな知識をスクリーニングして摂取していたという状況も過小視してはならない。つまり、明治時期を代表した知識人たちは「ヒロソヒー」の受容によって西洋的価値をそのまま身につけていったというより、彼らが「哲学」の習得によって、むしろ元からあった漢学・経学的世界観、あるいは価値観を不断に補強していた可能性さえ否定できないのである。そして、そのプロセスで中国古代のいわゆる「戦国諸子」の文献内容も、孔子、孟子、荀子、老子、莊子、韓非子など、それぞれの文献の著者とされる思想家の名を冠した「誰々の哲学」と呼ばれるようになる。つまりこうして「戦国諸子」も中国古代に存在したとされる「哲学者」になったと言えよう。

時代は明治末年から大正時期に至り、「修身論・修養論」、「国民道徳論」、あるいは「孔子教」³⁶などの学術領域や思想・教育活動、あるいはイデオロギーが次々と勃興するが、これらの思潮はいわゆる漢学や経学などの徳川思想から直接に発展、形成されたものではなく、明治時期をつうじて大学という場において「哲学」という知的訓練を受けた当時の若い知識人たちによって、江戸時代からの漢学的・経学的世界観や価値観を「哲学的に」反省、咀嚼し、それらを主体的に変質して再生されたものだったのである。

付記・本稿は博報堂教育財団による第一四回「日本研究フェローシップ」助成（二〇一九年九月～二〇二〇年八月）による研究成果の一部である。関係各位に心よりの感謝を申し上げたい。

注

- (1) 赤塚忠「序論」、赤塚忠ほか編『中国思想文化叢書2 思想概論』大修館書店、一九六八年、一―三〇頁。および坂出祥伸「中国哲学研究の回顧と展望——通史を中心として」『東西シノロギー事情』東方書店、一九九四年、一七―九四頁。
- (2) 李梁『近代日本中国学におけるポリティックスとアカデミズム——服部宇之吉と近代中国学』富士ゼロックス小林節太郎記念基金会一九九二年研究助成論文、一九九三年。
- (3) 梅約翰「明治学術資源、論理学與中国哲學的雛形」、景海峰編『拾新集：「中国哲学」建構的当代反思與未來前瞻』北京大學出版社、二〇〇七年、一〇六―一六頁。石百睿「早期現代東亞學術裡的東西哲學交織與「中国哲学」的誕生」、同書一三一―一四四頁。漢學史的視点からであるが、この論文集には、陳瑋芬の「由東京大學・漢学」相關學科的建立和變遷看近代日本的學術轉型」（一七一―一三〇頁）という論考も収録されている。
- (4) 桑兵「近代・中国哲学・発源」『學術研究』、二〇一〇年第一期、一―一一頁。
- (5) 桑兵「近代「中国哲学」の起源」村上衛訳、狭間直樹・石川禎浩共編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開——京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター研究報告』京都大学人文科学研究所、二〇一三年、一四三―一六六頁。
- (6) 陳威瑋「中国哲学史通史写作的發展——從中日交流的視角談起」、鍾彩鈞編『中国哲学史書写的理論与实践』中研院中國文哲研究所、二〇一七年二月、一四〇―一九四頁。
- (7) 曹峰「對内田周平的重新認識」『台灣東亞文明研究學刊』第二三卷第二期（二〇一六年十二月）、七五―九九頁。内田周平の評価について、曹氏が示唆を受けた研究は以下の二つ——李慶『日本漢学史』（上海人民出版社、二〇一〇年）と藤井倫明「被遺忘的漢学家：近代日本崎門朱子学者内田周平」『中正大学中文學術年刊』二〇一一年第一期、五三―八二頁。ただし曹峰らが主張するように、内田周平が日本で最初の「中国哲学史」関連著作の出版者であるかどうかについての筆者の見解は後文で述べる。
- (8) 筆者の知っているものだけでも、例えば、呉鵬『京都中国学派の「論語」研究』（長崎大学博士論文、二〇一二年）、胡珍子「狩野直喜の生涯・學術思想——近代日本京都支那先驅者」（関西大学博士論文、二〇一五年）、水野博太『大学と漢学——東京帝國大学とその前身校における漢学および「支那哲学」の展開について』（東京大学博士論文、二〇二一年）、胡頴芝「漱石の「向う側」から晩年の「則天去私」へ——東洋思想との関わりを中心に』（お茶の水女子大学博士論文、二〇二一年）などがある。胡頴芝はその中で夏目漱石が井上哲次郎の「比較宗教及東洋哲学」という授業のために執筆した「老子の哲学」というレポートの内容を分析している。
- (9) 丸山眞男「福澤論吉の儒教批判」『福澤論吉の哲学』岩波書店、二〇〇一年。
- (10) 丸山眞男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、一九五二年。
- (11) 丸山眞男「福澤論吉の儒教批判」、八頁。このような見解と似た例として、高坂史朗は西周が西洋の学術体系から「帰納法」という推論方式を移入したことによって、明治思想は儒学的な推理方式から離脱したとし、まだそこから離脱して

いない中国近代の思想状況とは対照的だと主張している。高坂史朗「儒教から哲学へ」、藤田正勝・卞崇道・高坂史朗共編『東アジアと哲学』ナカニシヤ出版、二〇〇三年、二〇七―二三四頁。

- (12) 濱田恂子『近・現代日本哲学思想史——明治以来日本人は何をどのように考えて来たか』関東学院大学出版会、二〇〇六年、四六頁。

- (13) 近年の研究においては、日本の近代化のプロセスにおいて儒学的特質が強まったと主張する研究者もいる。例えば宋学の論理構造の特色に注目した小倉紀蔵は、明治時代以降こそ「朱子学的思維」が日本社会に浸透し、その「理」秩序の頂点に立つ天皇を中心とした日本近代思想構造が完成したとしている。小倉紀蔵『朱子学化する日本近代』藤原書店、二〇一二年。

- (14) 渡辺和靖『明治思想史——儒教的伝統と近代認識論』ぺりかん社、一九七八年。

- (15) 井上克人『西田幾多郎と明治の精神』関西大学出版部、二〇一一年。

- (16) Kiri Paramore: *Japanese Confucianism: A Cultural History* (Cambridge: Cambridge University Press, 2016), pp. 118-140.

- (17) この点に関して、山村獎による研究は、陽明学が明治時代に入って「隆盛していくさま」を活写している。山村獎『近代日本と変容する陽明学』法政大学出版局、二〇一九年。ただ山村の研究には明治における「哲学の移入」という視角がほとんどない。

- (18) 笠松和也の執筆による「戦前の東大哲学科と『哲学雑誌』」の一文は、東京大学の設立から第二次世界大戦期までの講座制度、人事動態、研究内容（特にその『哲学雑誌』との関係において）の展開過程を丁寧に跡づけている。この論文は国会図書館所蔵の『東京大学草創期周辺「2014-2018」年度多分野交流演習「東京大学草創期授業再現」報告集』（東京大学大学院人文社会系研究科、二〇一九年）の二一―八五頁に収録されている。また東京大学哲学研究室のホームページでも閲覧可能である。その「研究成果報告」項目 (<http://www.lu-tokyo.ac.jp/philosophy/seikahumi>) を参照。

- (19) 哲学ハ分ケテ東洋及ビ西洋の二トス「……」東洋哲学ノ沿革ヲ論スルニハ支那哲学ト印度哲学トヲ以テ至要ナルモノトス「……」支那後世ノ哲学ハ大抵秦漢帝國以上ノ哲学ニ本ツクヲ以テ先ツ孔老孟莊楊墨等ノ學ヨリ始メ、或イハ其是非ヲ論ジ或ヒハ其得失ヲ辨シ或ヒハ其關係伝統及ビ流派等ヲ論証辨明シ、以テ暫時ニ東洋一般ノ哲学ヲ知ラシムルノ方ヲナスモノナリ。

- (20) 経書や諸子百家の内容についての講義なら、中村正直 (1833-1991) によるものも含まれよう。桑兵が中村正直の講義に関する情報を整理している。桑兵「近代『中国哲学』の起源」(一四六―一四七頁) を参照されたい。

- (21) 井上哲次郎は一八八二年（明治一五年）三月に東京大学の助教授に就任したが、在一八八四年（明治一七年）年にはドイツでの留学に向けて日本を出発し、帰国するのはそれから六年後の一九九〇年である。

- (22) 井上円了によるフェノロサ講義の該当部分の筆記については、柴田隆行とRainer Schuler がそのテキストと日本語への翻訳を提供している。「井上円了『稿録』の日本語訳」柴田隆行・Rainer Schuler 訳、『井上円了センター年報』第一九号（二〇一〇年）、一三九―一四〇頁および一四五―一五三頁。

- (23) 杉原四郎「フェノロサの東京大学講義——阪谷芳郎の筆記ノートを中心として」『季刊社会思想』二一四號、一九七二年、一九二頁。

- (24) 一つは、東洋大学に保存されている井上円了が記録したノートである。井上円了はこの講義を実際に聴講した。この筆記本には、その表紙に「東洋哲学史」、「井上哲次郎氏口述」、「井上円了」等の文字が記されている。もうひとつは、金沢大学附属図書館に所蔵されている「高嶺三吉遺稿」に含まれているノートである。水野博太「『高嶺三吉遺稿』中の井上哲次郎『東洋哲学史』講義」『東京大学文書館紀要』第三六號、二〇一八年三月、二〇―四九頁。

- (25) 水野博太「『高嶺三吉遺稿』中の井上哲次郎『東洋哲学史』講義」、二八―三〇頁。

- (26) 萩原善太郎「文学博士島田重礼君小伝」『帝国博士列伝』敬業社、一九九三年五月、四七―五一頁。

- (27) 三浦節夫「井上円了——日本近代の先駆者の生涯と思想」『教育評論社』、二〇一六年、九七頁。

- (28) 内田の『老莊学講義』の出版状況については、胡穎芝が『老莊学講義』は、管見の限りでは、一八八八（明治二一）年の版本と一八九四（明治二七）年の版本があり、およそ四〇頁である一年生向けの講義であると説明している点も参照されたい。胡穎芝「漱石の「向う側」から晩年の「則天去私」へ——東洋思想との関わりを中心に」、一八四頁。

- (29) 西村茂樹「性善説」『東京學士会院雑誌』第三編第六冊、一八八〇年、五一―五五頁、のち『西村茂樹全集』第二卷（一九七六年復刊版、六七―七二頁）に収録。

- (30) 三島毅「性の説」『東京學士会院雑誌』第一六編第一冊、一八九四年、一―二九頁。

- (31) 哲次郎の中国哲学史における「性論」に対する見解は、一八八九年ストックホルムで開かれた「万国東洋学会」において「Die Streitfrage der chinesischen Philosophen über die menschliche Natur」という主題で講演したものを日本語に翻訳して『哲學會雑誌』から発表した。井上哲次郎「性善惡論」『哲學會雑誌』、第四七号および第四八号（一八九一年）。この論文は島蘭進編『井上哲次郎集』（第九卷、クレス出版、二〇〇三年）に収録されている。

- (32) 工藤卓司は、明治時代に孔子をテーマとして書かれた三十人余りによる著作の内容を丹念に精査し、それぞれの孔子観

の特徴を分類している。工藤卓司「明治中期の孔子研究」『林慶彰教授七秩華誕寿慶論文集』（万巻楼図書公司、二〇一八年）、三九五―四三四頁。

- (33) 筆者はかつて、井上円了の思想家としての生涯において、儒学における「聖人」であった孔子のイメージが、次第に普遍倫理を実践する「哲学者」としての孔子のイメージに変わっていったプロセスをトレースした。以下の拙文を参照されたい。佐藤将之「井上円了の思想と行動における孔子への崇尊」『国際井上円了研究』第六號、二〇一八年八月、一七六―二〇〇頁。

- (34) 蟹江義丸『孔子研究』（金港堂、一九〇四年）の内容は、梁啓超（1873～1929）や王国維（1877～1927）によって注目、翻訳され、それが当時青年だった錢穆（1895～1990）らにも大きな影響を与えたことについては、工藤卓司や末岡宏の指摘がある。工藤卓司「蟹江義丸与『孔子研究』」『經学史研究的回顧与展望——林慶彰教授荣退紀念論文集 下冊』（万巻楼図書公司、二〇二〇年）、一四七―一五二頁、および末岡宏「蟹江義丸について」『富山大学人文学部紀要』第七〇号、二〇一九年、六五―八五頁。

- (35) 前掲書におけるバラモラ氏の視点は、儒教のそうした側面に注目して、日本儒教史を読み直したものとも言える。

- (36) 金培懿は「孔子教」の起源に関して、それは一八九〇年（明治二三年）に発布された「教育勅語」であったと主張している。金培懿「儒学之新生抑或変異——近代日本之孔子教運動」『日本儒学之社会実践』（万巻楼、二〇一九年）、二五七―三三三頁。しかしながら「教育勅語」には孔子は登場しないし、本稿に述べたような明治・大正時期における「孔子」論隆盛の脈絡で考えれば、明治から大正時期の日本において「孔子」への祭祀が復活していったのは、「勅語」による直接的な影響というよりは、井上円了の例のように、明治の知識人たちが孔子に対してもともと崇尊や親しみの情を持っており、それを実際に形として顕わしたいから「祭孔」というイベントを復活させたと考えた方が実情に近いのではないか。

37

儒教を媒介とする ヨーロッパ・日本・中国の近代化について

井川義次

東亜諸国は、近代西欧哲学をいかに受容したのか、あるいは既存の思想枠組みをもってどのように主体的に咀嚼したのか。アジアの西欧化・近代化の研究には、こうした側面からの考察、アプローチが必要となる。ただ異文化受容の点において言うならば、イエズス会士たちによる欧米世界への情報送達の結果、儒教が近代理性重視の哲学者たちに認識され、ひいては受容されるところがあった。例えばライプニッツ、ヴォルフによる中国哲学受容である。だとすれば人間の活動運動としての哲学の運動というものを公平な形で見るためには、西から東への影響のみならず、文献情報を通じた東洋哲学のヨーロッパ西漸に関する歴史的考察も必要になるのではなからうか。

本論文はイエズス会宣教師による中国思想情報がヨーロッパにもたらした影響について、とりわけ近代ヨーロッパ理性の形成において中国思想の関与がきわめて大きな役割を果たしていたことについて、その実相を当時の文献資料に即して、具体的に浮かび上がらせる試みである。